

法隆寺



* 出羽家文書436「御宝物図絵」

解説

法隆寺は、7世紀のごく初めに仏教を中心とする国を作ろうとした聖徳太子が建てた寺です。火災により焼失しましたが、再建されました。のち聖徳太子を仏と同一して帰依し供養する太子信仰の中心となりました。また法隆寺の釈迦三尊像は飛鳥文化の代表的な作品とされており、建造物は1993（平成5）年にユネスコの世界文化遺産に登録されました。

法隆寺に伝わった宝物は、江戸時代に江戸と京都で2度ずつ一般公開されています（出開帳）。

写真は、1842（天保13）年に伽藍修復の資金集めを主目的として、江戸の回向院で一般公開された際に作られた法隆寺宝物の絵入りの解説書（図録）です。ここでは、この時公開された115件の宝物の内88件が図示されており、83件は1878（明治11）年に法隆寺から皇室に献納されました。さらに太平洋戦争後に国へ移管されて、現在は東京国立博物館の法隆寺宝物館に保管されています。

これらの宝物は、正倉院宝物と双璧をなす古代美術のコレクションであり、8世紀の作品が中心である正倉院宝物よりも古い7世紀の宝物が数多く含まれていることから高い評価を受けています。

* 当館には、江戸時代以降に出版された法隆寺伽藍図として、安部家文書1437・1449、山田家文書（徳山市）414 などがあります。